



日本史⑩ (平城京遷都)

3月①のごあいさつ

山内公認会計士事務所
2024年3月1日(金)

2024年は平城京遷都から1314年目である。

710年(和銅3)に藤原京から遷都して約70年間、奈良の都であった平城京は唐の都・長安に倣って造営された都市で、東西約4.3キロ、南北に4.9キロ、その広さの敷地がきっちりと区画されたものであった。

平城京に居住した人口はほぼ17万人前後と推定され、そのうち、貴族とその家族は約1,000人、その他は中・下級の官人と雇夫、仕丁および一般庶民であったと考えられる。

平城京の経済活動は、右京八条二防と左京八条三坊に設置された東西の官営の市で、その市を中心に活発な経済活動をしていたが、それはヨーロッパの中世都市のように商業や手工業が経済の中心ではなく、天皇の居住地として、多数の官人の勤務地として、地方からの調庸の貢納に依拠した経済構造であった。

平城京は藤原京から移設された。

藤原京の建設には10年以上かかったが、平城京は、奈良山のふもと奈良盆地の奈良山のすそ野を一から開発し、更地とも言うべき奈良盆地を突貫工事で新たな遷都の工事を3年で終えた。

主な工事である川の付け替え工事や整地作業と併せて、藤原京にあった大極殿等の移築などをわずか3年で終り(全体的には更に数年がかかる)、710年には都としての外形を整えた平城京に移ることとなった。

新都建設には、工程と工期の予測を立て、必要な労働力を創り出し、1万人の労働力が必要となれば、彼等が寝泊りする小屋の材料を確保するという計算で計画的に行われた。

新都造営には、先進国唐に学び、その影響を受け、大陸との国交によって力を付けようとする、東アジアの中の日本という視点がある。

また、白村江の戦いから壬申の乱を経ての遷都であり、日本の歴史の明確な線があり、その「線」は未来にもつながって行った。

その「線」に対して、「なぜ遷都を急いだのか」、「なぜ遷都を妨害する勢力があったのか」、それが日本の歴史の「面」であるように思える。

参考：(日本史史料集 山川出版社、日本通史 复旦大学出版社)
(平城京 安部龍太郎著 令3.2.25 角川文庫)